

## トルコのイスラーム神秘主義の現在：

### 宗教実践、聖廟参詣、秘教の伝達について

平野貴大（日本学術振興会特別研究員 P D）

#### はじめに

オスマン帝国時代はスーフィズムが隆盛。スルターンや宰相、官僚らの多くがスーフィー（イスラーム神秘主義者）の影響を受けていた（Kılıç 2006, 37; Kılınc 2011, 811）。

1923年にトルコ共和国成立。世俗主義政策の一環で、1925年に全タリーカの活動が法律で禁じられ、現在に至る（Kılıç 2006, 37-42; Erguner 2015, 26-29; 粕谷 2019, 1-27）。ただし、観光と強い結びつきを持ちながら、タリーカの活動の幅は徐々に広がってきた。本発表は2019年12月の調査をもとにトルコ共和国におけるタリーカ（主としてメヴレヴィー教団について）の現在の状況を報告する。

#### 本発表で扱うスーフィー教団（タリーカ, *Ṭarīqa*）

- ・メヴレヴィー（Ar: Mawlawī, Eng: Mevlevī）教団<sup>1</sup>
- ・ナクシュバンディイー・ハッカーニー（Ar: al-Naqshbandiyya al-Ḥaqqāniyya）教団
- ・ハルワティイー・ジェッラーヒー（Ar. al-Khalwatī al-Jarrāhī）教団

→それぞれの教団を区別する指標は、師弟関係の系譜（*silsila*, 預言者ムハンマドから誰を通じてタリーカのシャイフに伝達されたかを示す鎖）の違いである。

### 1. 宗教実践

#### 現在のテッケ（*tekke*, 修道場）

1925年に全テッケが閉鎖されて以降は、スーフィー教団の活動の場という名目でテッケを使用することはできなくなった。1925年までにはイスタンブールだけでも約50教団から成る400ものテッケが存在していたというが（Kılıç 2006, 37）、それらの幾つかは博物館、墓地、モスクなどに転用されて現在まで利用されている。

例、ルーミー廟に併設されていたテッケは1927年に「メヴラーナー博物館」となった。

#### ズィクル（*dhikr*）

アッラーを思い起こすこと、転じてアッラーの御名を唱えることの意味。タリーカごとに決まったズィクルの形式がある。弟子（*murīd*）が師にバイア（*bay‘a*, 忠誠の誓い）を行うと、師からその教団に伝わる「定型祈願（*awrād*, 神の御名の唱えること、神の称賛、祈願な

<sup>1</sup> ルーミー自身はタリーカを創設することはなく、一般的にメヴレヴィー教団の創設者はルーミーの息子のスルターン・ワラド（*Sulṭān Walad*, d. 1312）であるとされる（Atasoy 1992, 257; Küçük 2012, 22）。

どを含む)」が与えられる。

### メヴレヴィー教団のズィクルとアウラード (awrād)

心における「アッラー」の連呼 (Taha 氏)<sup>2</sup>。アッラーの別の御名は「定型祈願 (アウラード)」の中で唱えられる。なお、メヴレヴィーの「定型祈願」は Mevlana International Foundation で購入可能。

### セマー (samā‘, 原義は「聞くこと」)<sup>3</sup>

セマーはズィクルの一種 (Faruk Hemdem 師、Taha 氏)、セマーの最中は一回転につき一回「アッラー」と心で唱えるが、何回転するかはデデ (dede)<sup>4</sup>によって異なる (Taha 氏)。Faruk Hemdem 師の見方では、メヴレヴィーで体系化されたセマーを後にジェッラーヒー教団やナクシュバンディー教団などが真似て実践<sup>5</sup>。

#### ・セマーの解禁

1925年以降30年弱の間はセマーの実践は禁止されていたが、1953年にルーミーの命日 (Shab-e ‘Arūs, 婚礼の夜)<sup>6</sup>である西暦の12月17日に、トルコの偉大な詩人であるルーミーを祝した文化行事として1950年代に解禁。その後、トルコのフォークダンスとして様々な機会や場所で演じられるようになった (Gamard 2010, 109-110)<sup>7</sup>。

<sup>2</sup> 2019年12月15日にKonyaの宿泊先のホテルにおいてルーミーの子孫でメヴレヴィー教団員のTaha氏に、16日にKonyaのMevlana International Foundationにおいてメヴレヴィー教団の指導者であるFaruk Hemdem氏にインタビューを行った。以下、(Taha氏)

(Hemdem 師) という表記はこの時のインタビューの内容である。

<sup>3</sup> セマーとはアラビア語の samā‘ に由来する言葉である。その原義は「聴く(聞く)こと」であるが、そこから派生して、クルアーンや神秘主義的詩を聞いて理解することを含意するようになり、神秘主義の実践の1つを示す用語になっていった (During 1995, 1018-1019; ザルコンヌ 2011, 39-40)。

<sup>4</sup> 伝統的用法ではメヴレヴィー教団におけるデデとは、テッケで1001日間の修行を果たした者に与えられる導師としての称号の1つである (Friedlander 1992, 109)。

<sup>5</sup> ルーミー自身が現在のメヴレヴィー教団のセマーの儀礼の形成にどれほど関与していたのかは正確にはわかっていない。セマーの中の devr-e Sultan Walad (スルターン・ワラドの周回) という儀礼の名前が示唆するように、ルーミーの息子でメヴレヴィー教団の創設者であるスルターン・ワラド (Sultān Walad, d.712/1312) の時代に体系化された儀礼もある。メヴレヴィー教団の現在のセマー実践方法が確立されたのは、ピール・アーディル

(Pīr-‘Āil, d.864/1460) の時代である (Yazıcı 1991, vol.6, 883; Moyne 1998, 74; Kılınç 2011, 812)。

<sup>6</sup> メヴレヴィーの伝統では、ルーミーの命日は悲しみの日ではなく、祝祭の日として扱われている。「婚礼の夜」が祝祭の日とされるのは、この日にルーミーが現世のあらゆるしがらみから解放されて、神と預言者ムハンマドの許に還ったからであるとされる (Yeniterzi 2006, 22-23)。

<sup>7</sup> Gamard によれば、53年以降のセマーの解禁の宗教的な是非については解釈が分かれているようである。一方では25年以降スーフイーとしての活動が禁じられたメヴレヴィー

メヴレヴィーのセマーは7つの動作から成る。(1) 預言者賛美、(2) 葦笛の即興、(3) 太鼓、(4) Devr-e Sultan Walad、(5) 回転と周回、(6) クルアーンを聞く、(7) 祈願 (du 'ā) (Kılınç 2011, 813-817) <sup>8</sup>

### セマーの観光者のためのショーとしての側面と宗教儀礼としての側面

#### 観光用：

現在ではトルコの文化観光省が職員としてセマー集団を抱えており (Gamard 2010, 119)、採用基準は精神的階梯ではなく四肢の長さや身長など観客を魅了できるかどうかにあるとされる (Erguner 2015, 31)。

#### 宗教儀礼：

現在でもルーミーの子孫でありメヴレヴィー教団の指導者 (makam chelebi) である Faruk Hemdem 師にはシャイフを任命する権限がある<sup>9</sup>。各教団の小規模な施設でのズィクルやセマーは宗教的側面も存続。

## 2. 聖廟参詣 (ziyāra)

### 宗教的巡礼地としての側面と観光地としての側面が曖昧

- ・有名な大きい聖廟 (ルーミー、シャムセ・タブリーズ) は観光的側面も強い。
- ・小さい聖廟や私有地内の聖廟 (ナクシュバンディー、メヴレヴィー、ジェッラーヒーのテッケ内の廟) は巡礼地としての側面が強い。

#### ・メヴレヴィー教団の例

**ルーミー廟 (コンヤ)：**現在は博物館で、多くの観光客が参詣に訪れる。ただし、熱心にドゥアーやズィクルをしている巡礼者もあり、観光地と巡礼地の2つの側面が混ざっている。

**シャムセ・タブリーズ廟 (コンヤ)：**本当にシャムスの遺体が安置されていたかは疑わしいが、シャムセのものと伝えられているようである。イラン人の観光客が非常に多い。ルーミ

---

教団員に儀礼の参加を可能にし、メヴレヴィー教団に新たな息吹を吹き込む者であったと言える。それに対して他方ではセマーを観光客のためのショーに格下げすることでその精神性を低下させることになったとも評価されるようである (Gamard 2010, 110)。

<sup>8</sup> 本発表におけるセマーの実践方法の説明は実際にコンヤで受けた説明に加えて、Friedlander (1991, 132-135)、Kılınç (2011, 813-817) における記述を参照した。メヴレヴィー教団のセマーの儀礼においては、彼らの1つ1つの装束や動作が象徴的な意味を持つ。例えば、彼らの帽子 (sikke) は墓標を、白い衣装は死装束を示す。各動作や衣装の持つ象徴的意味については、Kılınç (2011)、Gündüzöz (2018) を参照されたい。

<sup>9</sup> この箇所は、ファールーク・ヘンデム師からイジャーズを受けたメヴレヴィー教団のシャイフである Gamard によるウェブ上の記事 (About the Mevlevi Order) を参照した。URL は参考文献を参照されたい。

一廟と同様に観光地としての側面が強い。

### その他のメヴレヴィーシャイフたちの廟

Yenikapı Mevlevihane は現在は大学のキャンパス、Galata Mevlevihane は博物館となっているが、いずれも内部にメヴレヴィーのシャイフたちの廟が併設されている。我々が訪問した時には、巡礼者のような人はいなかった。

#### ・ナクシュバンディーの例

ハッカーニー教団：Hüseyin Hıfzı Effendi (d. 1273/1856-7) たちの廟がテッケ (Bedewi Tekkesi) の中に安置。壁には Hüseyin Hıfzı Effendi の祖先の Ahmad Badawi (d. 1267 CE, エジプトで影響力のあるバダウィー教団の開祖) の名前が書かれている。

#### ・ジェッラーヒー教団の例

ジェッラーヒー教団の創設者の Nur al-Din Jerrāhī (d.1720) の廟。施錠されており、内部の見学は特定の公開時間しかできないようである。

→観光地としての側面と巡礼地としての側面が共存。法的には世俗的な博物館やお墓となっているが、依然として宗教的・神秘主義的側面を失ったわけではない。テッケが管理するような聖廟は現在でも観光地ではなく、巡礼地としての地位を保持。

## 3. 秘教の伝達

### メヴレヴィーの例：

1925年以前までの伝統では、デデ(導師)になるためにはテッケに住み込みで1001日間の修行(çile)が必要(Friedlander 1992, 106-110; Atasoy 1992, 265; Erguner 2015, 32-33)。しかしながら、現在ではテッケが閉鎖されているため、修行の実践は極めて困難。そのため、伝統的意味では秘教の伝達は表向きは途絶えたと言える(Erguner 2015, 32-35)。

ただし、教えの継承は完全に途絶えたわけではない。現在でも伝統的方法に近づけながらも法的に許される範囲内でセマー資格者(semazen)を養成している(Friedlander 1992, 87)。セマー資格者に対する免許皆伝(ijāza)式も執り行われている<sup>10</sup>。また、Faruk Hemdem 師 (b.

---

<sup>10</sup> Taha氏によれば、メヴレヴィー教団の教説を学び、同教団のムリードになるための扉は現在まで閉ざされておらず、個人的にシャイフを見つけて師事することは可能であるという。また、マスナヴィーを学ぶことでルーミーの信奉者という意味での「メヴレヴィー」になることはできるという。それに対して、ErgunerはTaha氏とは異なる見解をとる。Ergunerによれば、「テッケで1001日間修行した者」こそがシャイフで、シャイフにバイア(忠誠の誓い)を行なった者がムリード(murīd, 弟子)ため、テッケが存在しない以上、伝統的な意味でのメヴレヴィー教団のムリードやシャイフになることは不可能であるという(Erguner 2015, 34-35)。

2020年1月23日(土) 特別公開文化講座  
於：東京ジャーミイ本館1階多目的ホール

1950) だけがメヴレヴィー教団のシャイフの任命権を持つ。

#### ナクシュバンディーの例：

ハッカーニー：旧テッケの一部はモスクに転用、現在のシャイフである Mehmet Adil 師 (b. 1957) はキプロスやイスタンブールを中心に活動→トルコ国外での秘教の継承が可能。

近年はインターネットを用いた教えの伝達にも取り組んでいる。彼が拠点とするイスタンブールの Akbaba Dergah は、その名前で 2018 年 12 月に youtube チャンネルを開設しており、Mehmet Adil 師の講話を、英語通訳をつけて発信している。コロナ禍の影響もあってか、2020 年の動画投稿数は前年と比較して急増している。2020 年 12 月 31 日時点での同チャンネルの投稿動画総数は 282 である。再生リストから確認する限り、2019 年の講話は 19 動画、2020 年の講話は 217 動画)。このチャンネル以外にも、弟子たちがシャイフの動画を挙げているチャンネルが多数あり。

#### ジェッラーヒーの例：

閉鎖的。テッケは閉鎖した後も、ジェッラーニーの廟として存続。現在も教えは継承されているよう。ジェッラーヒー教団とその支派 Nur Ashki 教団がアメリカなどで積極的に活動。

→トルコではテッケの閉鎖によって、秘教の継承は難しくなっている。しかし、完全に途絶えてしまったわけではなく、個人的に師から弟子に継承されることや、海外に拠点を移すことで伝統を保持しているタリーカも少なくない。

#### おわりに

現在のトルコにおいてもイスラーム神秘主義の活動は途絶えておらず、それぞれの教団ごとに様々な方法で伝統の継承を試みてきた。現在では、法律に反しない限りでの個人的活動を通じて、また、観光要素を取り入れることで、彼らの宗教的活動が行われている。

#### 参考文献

Atasoy, N., "Dervishes Dress and Ritual: The Mevlevi Tradition," (transl. M. E. Quigley-Pınar), in *The Dervish Lodge*, Berkeley, Los Angeles, Oxford: University of California, 1992, 253-268.

Erguner, K., "Reflections of a Vanished World: Mevlevi Tradition after 1925," *Mawlana Rumi Review* 6, 2015, 26-35.

During, J., "Samā'," in *Encyclopaedia of Islam, Second Edition* (P. Bearman, et al.), 1995, [https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/sama-COM\\_0992?s.num=1&s.f.s2\\_parent=s.f.book.encyclopaedia-of-islam-2&s.q=sama](https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/sama-COM_0992?s.num=1&s.f.s2_parent=s.f.book.encyclopaedia-of-islam-2&s.q=sama) (accessed on 20, January, 2021)

Friedlander Sh., *The Whirling Dervishes*, Albany: New York University Press, 1992.

2020年1月23日(土) 特別公開文化講座  
於：東京ジャーミイ本館1階多目的ホール

Garnard, I., "About the Mevlevi Order," <http://www.dar-al-masnavi.org/about.html> (accessed on 2 January 2021).

———, "The Popularity of Mawlānā Rūmī and the Mawlawī Tradition," *Mawlana Rumi Review* 1, 2010, 109-121.

Gündüzöz, G., "Some Symbolic Elements in the Mawlawi order, *The Journal of Kırıkkale Islamic Sciences Studies Faculty*, 2018, 39-48.

Kılıç, M. E., "Sufism in Contemporary Turkey," *Japan Association for Middle East Studies* 21-1, 2006, 37-48.

Kılınç, N., "Mevlevi Sema Ritual Outfits and Their Mystical Meanings," *E-Journal of New World Sciences Academy Humanities* 6-4, 2011, 809-828.

Küçük, H., "Sultan Walad's Role in the Foundation of the Mevlevi Sufi Order," *Mawlana Rumi Review* 3, 2012, 22-50.

Moyne, J. A., *Rumi and the Sufi Tradition*, Binghamton: Institute of Global Cultural Studies Global Publications, 1998.

Yazıcı, T., "Mawlawiyya," in *Encyclopaedia of Islam*,  
[https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/mawlawiyya-COM\\_0715?s.num=0&s.f.s2\\_parent=s.f.cluster.Encyclopaedia+of+Islam&s.q=mawlawiyya](https://referenceworks.brillonline.com/entries/encyclopaedia-of-islam-2/mawlawiyya-COM_0715?s.num=0&s.f.s2_parent=s.f.cluster.Encyclopaedia+of+Islam&s.q=mawlawiyya)  
(accessed on 20 January, 2021)

粕谷元「1925年のトルコ大国民議会におけるタリーカ活動禁止法案審議」『イスラム世界』91、2019年、1-27頁。

ティエリー・ザルコンヌ(著) 遠藤ゆかり(訳)『スーフィー—イスラームの神秘主義者たち』創元社、2011年。

安田慎『イスラミック・ツーリズムの勃興：宗教の観光資源化』ナカニシヤ出版、2016年。

Yeniterzi, E (著) 宗教法人東京トルコ・ディヤナト・ジャーミイ(監訳) 西田今日子(訳)『神秘と詩の思想家メヴラーナ：トルコ・イスラームの心と愛』丸善プラネット株式会社、2006年。